

誰一人取り残すことのない教育へ

積極的にタブレットを取り入れた授業を展開している、霧島小学校を取材しました。

これまでの日本の学校教育は、教科書や黒板を用いて、板書を取る授業方法が中心でした。それに対し、GIGAスクール構想では「すぐに」「どの教科でも」「誰でも」使えるICTの実現を掲げています。各教室にはタブレットを保管したり充電するキャビネットが整備され、子どもたちは登校すると、自分の端末を取り出して使います。

プリントの配布や回収など、これまで時間がかかっていたことが、一瞬でできるようになり、授業のテン

ポが良くなったそう。また、紙などに書いて、黒板に貼って共有していた友達の考えが、タブレットで共有できるようになりました。

子どもたちの様子

当日行われていた理科の授業では、水溜りの波紋の動画を観察し、水の流れを考えていました。

また、算数の授業では、小テストが早く終わった児童から順に、タブレットを出し、デジタルドリルの問題を解いていました。このドリルでは、児童一人ひとりのレベルに合わせた学び方を選べるようになっていきます。

スケッチ大会では、写真を何枚か撮って、自分でよいと思う構図を考えたり、教室での仕上げ作業の時に画像を確認できるので、じっくり作品作りに取り組むことができた嬉しそうに教えてくれました。

先日は、グループごとにSDGsについて調べたものをまとめて発表

したという子どもたち。発表していた子どもたちによると、発表していない友達の考えもわかるようになってそうです。

タブレットは、授業に役に立つと感じている児童が多いようです。



児童の変化に手ごたえ

2カ月で子どもたちの積極性が大きく変わったと話すのは、担任の古川先生。

自分の様子を自分で見られるタブレットの良さを活かし、逆上がりのフォームの確認などに活用する児童もいるそうです。これまで、引っ込み思案だった子が、自分の想いを共有する機会が増えたことで、発表の際に手を挙げる姿が見られるようになったと、変化に手ごたえを感じています。

霧島小学校の名越校長は、「これからは子どものうちから健康のことも含めICTとどう付き合うかを学ぶ機会が大切。デジタルとアナログのバランスを大切に積極的に取り組み



たい。」と語ります。そのほか、今後は、地域と一緒に子どもたちの調べ学習に取り組んだり、ゆくゆくは地域の方々にも触っていただく機会を作りたいと意気込みます。

教職員の負担軽減と働き方改革へ

それぞれの学校では、統合型校務支援システムの運用もスタートしています。教職員の授業準備や成績処理などの負担軽減ができ、学校における働き方改革にもつながります。

1年早く令和2年度から校務支援ソフトを導入・活用している隼人中学校の井久保教頭、教務主任の大幅先生にお話を伺ってきました。

出欠簿や成績表、調査書や要録など、さまざまな場面で活用が進んでいます。

特にこれまでの学期末には、夜中までかかっていたまとめ作業の効率が良くなり、定時に終わることが増えてそうです。

年度当初のタブレット整備については、管理しなければならぬ端末数や電源保管庫が多いという、大

規模校ならではの課題もありました。しかし、授業がスタートしてからは、特に授業が苦手な子ほど変化すると感じているそうです。

今後は、生徒指導や教材研究のための時間、子どもたちに接する時間に活用したいと意欲的に話されていました。

